

山田 英恵さん（広島県広島市佐伯区出身）  
2018年度1次隊 青年海外協力隊  
派遣国：モンゴル 職種：小学校教育  
2019年8月11日（日）中国新聞 SELECT 掲載



※中国新聞社の許諾を得ています

## 児童の考える力を育む

「ハナバクシャー！ サヤンバーノ？（はな先生！お元気ですか？）」と教室から元気なあいさつが聞こえ、私の朝は始まる。

国際協力機構（JICA）青年海外協力隊として発展途上国モンゴルの北部ダルハンに、算数と図工の小学校教員として派遣されて1年がたった。皆さんは発展途上国の学校と聞いてどんなことを想像するだろうか。机や椅子がぼろぼろ、黒板はない、紙とペンを持って来るのがやっと。私のイメージはそうだった。



キャプション：  
授業で箱の形について考える児童

しかし、ここモンゴルの学校には机や椅子、黒板はもちろん、液晶テレビや公衆無線 LAN サービス「Wi-Fi（ワイファイ）」もある。一見すると発展途上国とは感じられない。しかし、問題は授業方法と学力、児童の家庭背景にあった。授業は教え込みの暗記型。先生が答えまで全て説明し、児童はそれをノートに写して終わりなんて日もある。

理解しないまま新しい単元になり、勉強が苦手な児童はどんどん落ちこぼれていく。それだけではない。アルコール依存症の親、兄弟が多く、学校から帰っても弟妹の面倒を見なければならず、宿題どころではない児童もいる。

だから、授業は一時間一時間が勝負なのだ。児童主体の授業になるよう担任の先生と指導方法を考え、チームティーチングをする。大切なのは児童が自分で考える手だてや時間を、モンゴルの先生が作ることだ。

また、宿題をやっていない、九九を覚えていない児童とは時間が許す限り一緒に勉強をしている。そんな中、児童の「分かった！」の声と笑顔がたまらなくうれしい。勉強が苦手な児童にも分かったと思える時間が増えるよう、現地の先生と共に奮闘していきたい。